ハーレムキャッスル
Harem Castle 3
小説 竹内けん　挿絵 Hiviki N
二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

登場人物紹介

Characters

ウルスラ

銀色の鎧を纏う、美しき女騎士。騎士団を率いる、王太子フィリックス腹心の部下であり、幼馴染みである最愛の女性。

グロリアーナ

フィリックスの義母にあたる、イシュタール王国の女王。若くして未亡人となってしまったため、熟れた肉体を持て余している。

ディアーネ

女王グロリアーナの異母妹。優雅な舞いを得意としており、しなやかで柔軟な肢体を露出の激しい衣装に包む。

コーネリア

ペルセポネ王国の王女で、フィリックスのお妃候補。剣術に長ける男装の麗人。ウルスラをライバル視しており、何かと勝負を挑む。

キャロル

いまは亡きイシュタール王国の宰相の孫娘で、フィリックスの世話をするメイド。見る者の保護欲をそそる。

ルイーズ

メイド長であり、現在は政務補佐官も担当している才女。常に冷静沈着で、知性的な美貌の持ち主。

マガリ

フィリックスと年齢が近いメイド。彼が騎士見習いをやっていた頃から憧れていたという健気な元気娘。

シャクティ

イシュタール王国のクーデターに参加していたが、フィリックスの説得に応じて部下となった軍師。飄々とした性格。

フィリックス

元は騎士見習いであったが、数奇な運命に翻弄されイシュタール王国の王太子の座についた少年。

サーシャ

イシュタール王国の森林貴族の娘で、王太子付きのメイドの一人。フィリックスの側室になって気楽な生活を送るのが夢。

第一章　淫夢は終わりぬ　007
第二章　女王さまとデート　044
第三章　赤い薔薇（バラ）　079
第四章　難儀な女たち　116
第五章　高貴なる義務（ノブレスオブリジェ）　154
第六章　お仕置き　203

『第二章　女王さまとデート』より

舐めているうちに小水の味はなくなり、愛液の味が中心となる。
「はぁ、はぁ～～ん……」
樹木にしがみついたままグロリアーナは気持ちよさそうに喘ぎ声を上げる。
フィリックスとしては、義母の媚粘膜をいつまでも楽しんでいたかったのだが、若い牡の身体はそれだけでは満たされることはない。
やがて我慢の限界に達した小狼は、蜜溢れる陰唇から顔を離し懇願した。
「ママ……もう、我慢できない……」
「うふふ……」
しょうがないわね。と言いたげな艶然とした笑みを浮かべた女王は、股の下の少年にゾクゾクするような流し目をくれて、ゆっくりと艶やかな口唇を開閉させる。
「イ・レ・テ」
ズキンッ！
零れ出る大人の女の色気が、少年をただの淫獣へと変える。
急いで立ち上がったフィリックスは、興奮に震える手でズボンから逸物を取り出した。
ぶるんっと唸りを上げて飛び出した逸物は、臍につかんばかりに反り返る。
それを目にした妖女は満足げに頷くと、少年が迎え入れやすいようにと、両手で樹木にしがみつきながら、お尻を差し出す。
お尻の穴から陰唇までまるさらしの姿勢だ。そのヒクヒクと痙攣している濡れ輝く義母

の蜜壺に、肉鳴りするほどにいきり立った逸物を突撃させる。
ズブっ！　ズブズブズブゥ……ッ！
「あ、あ～ん♪」
お子様の生殖器は、熟女の生殖器の中に簡単に呑み込まれてしまった。
グロリアーナの膣の締まりは、フィリックスが体験したことのある女性の中で、一番緩い。
しかし、温水のように暖かく、それでいて真綿のようにやわやわっと締めてくるのだ。
それはいつまでもとどまっていたいような安心感がある。
女性の価値というのが、単なる締まりのよさとか、襞の豊富さではないということを教えてくれる魔性の蜜壺だ。
「くぅ～……」
快感に呻きながらも両腕を前に回したフィリックスは、零れ出る乳房を鷲掴みにした。
巨大な肉まんのようにほかほかで柔らかい乳房は、なんとも揉み応えがある。
別に乳房に限ったことではないが、グロリアーナの身体は、どこもかしこも柔らかくて、抱き心地がいい。
（ママの身体ってなんでこんなに気持ちいいんだろう。オオカミがコヒツジの肉に食らいつくときってこんな気分なのかなぁ）
獣欲を我慢できない少年は、夢中で両の乳房を揉みしだきながら、腰を叩き込む。

「あんっ！　はん！　ああん……！」
「ママ、声が大きい」
慌てたフィリックスは忠告するが、若人に腸を貪り食われる淑女は、紅唇を閉じることはできない。
「だってぇ～♪　はぁん～♪　坊やのおちんちんが入っているのよ♪　わらわの中に坊やのおちんちんが♪　暴れているのよ♪」
全身から淫ら汗を滴らせながら、恍惚と喘ぐ淑女のあまりの色香にあてられて、少年がますます夢中になって腰を使っていたときである。思いもかけない声がかけられた。
「おっ、坊主頑張っているな」
「っ⁉」
男の声に驚いて振り向けば、年のころは二十歳前後のお兄さんが、同年代のお姉さんを連れて見物している。
おそらく町人のカップルだ。
「驚かせて悪かったな。だがな、おまえの腰使いは基本がなってないぜ。女を楽しませるには、ただがむしゃらに腰を叩き込めばいいってものじゃない。二回浅く突いたら一度深く突く二浅一深。これだけで女の乱れ方はずいぶんと変わるものよ。やってみ。じゃ、邪魔したな」
言うだけ言って男は、恋人の肩を抱いていなくなってしまった。

驚き硬直していたフィリックスだが、いまさらながら気づいた。ここは城の裏手。人気はないが手入れのされた美しい森林である。庶民にとっても憩いの場であろう。こういう場所が夜、どのような目的に使われるか。まして、今日は祭りの夜である。みんな開放的になっているのか、物陰のあちこちではいろいろなカップルがお楽しみ中だった。

（あはは……こういう場所だったんだ）

背中から冷や汗を掻いたフィリックスだが、まさかこんなところで情事を楽しんでいる年の差カップルが、女王と王太子とは、一般人には信じられないはずだ。

変に度胸の据わっている少年は気を取り直すと、試しに言われた通りにやってみる。二度浅く突いてから、深くドスンと叩き込んだ。

「は、あんあああん……そんな、見られた。見られちゃった。坊やとエッチしているところを、おしっこしているところを見られちゃったぁ！　だ、ダメ、そんな焦らすような、焦らすようなことをしたらダメ！　ああ、もっと奥まで！」

女王としての自意識が働いたのだろうグロリアーナは、もの凄い乱れ方だ。膣内もキュンキュンと締めてくる。

（うわ、すごい。ママはいつも淫らだけど、いつも以上に反応がいい。やっぱ見られているからかな。いや、それだけじゃなくて、やっぱ腰使いの影響もあるみたいだ。へぇ……腰の使い方一つで、女性の反応ってずいぶん変わるもんなんだなぁ）

フィリックスが二浅一深の腰使いを試していると、これを皮切りにいろいろなカップル

が声をかけてきた。
「小僧、マブイ姉さん連れているね」
「あらあら、奥さんったら、上手く若い子をたらし込みましたわね」
「腰はただ出し入れするんじゃなくて、入れながらきゅっと押し上げるのよ。……そ、上手上手♪」
「三十路の女ってのは、色欲の塊だからな。たっぷり溺れさせてやんな」
気のいいお兄さんお姉さんが、よってたかってアドバイスしてくれる。
いつもガンガンと本能の赴くままに力の限り突きまくっていたフィリックスは、自らも高まってあっという間に果ててしまうのが常だった。
しかし、二度浅く突くことで、男根への刺激が思いの外に弱まり、射精欲求に耐えられるようになった。
（うわっ、ぼくがこんなに長持ちしているのって初めてだ）
女はいつも以上に乱れているのに、男はいつも以上に長持ちする。
感動しているフィリックスとは逆に、グロリアーナは切なげに腰をくねらせまくった。
「激しく、激しくして欲しいのに……♪　お願いもっと奥まで……」
「まだだぞ坊主。淫乱痴女お姉さまが、おまえみたいなガキを誘惑して食うときに期待しているのは、若さに任せてガンガン掘られることなんだ。だが、それは最後の最後だぞ。女が焦れ狂うまでたっぷり焦らしてやれ」

「あ、はい。わかりました」
見知らぬ人々に言われるがままに二浅一深の腰使いを続ける。
（ああ、でもぼくももう出したいかも。思いっきり腰を使って、ママの中に思いっきりビュービュー出したい）
牡として本能の赴くままに腰を使いたい、という欲求の代償行為として、なんとなく両手の指で、勃起しきっている乳首をきゅっきゅっと扱いてしまった。
そうやって耐えていると、ついにグロリアーナが啜り泣き始める。
「坊や、お願い、ちょうだい……これ以上やられたら狂っちゃう！　狂っちゃうのよぉ！」
膣洞が狂ったようにキュンキュンと締まってくる。
（す、すごい。おちんちん消化されそう。も、もう我慢の限界だ）
二浅一深という悠長な腰使いでも、フィリックスが果ててしまいそうになったときである。見知らぬお兄さんが掛け声をかけてくれた。
「いまだ。坊主。いっきにいけっ！」
その声に乗せられたフィリックスはラストスパートに入った。
熟女のくびれた腰を捕まえると、鬼のような勢いで突きまくる。
パンッ！　パンッ！　パンッ！　パンッ！
女の尻と男の腰が激しくぶつかりあう音が、夜の森林の中に響き渡る。亀頭部が容赦なく子宮口を突き回した。

「ひっ、ひっ、ひぃ〜、いきなり、す、すごい。ああ、あひぃぃぃぃ、やめぇぇぇぇ!!!」
じっくりと焦らされたあとにきた鬼腰。これに熟女は耐えられなかった。いや、熟れた牝であればこそ耐えられなかった。
「あん、あん、ああん……ひぐぅ♪　奥までグリグリ、ダメぇぇぇん、壊れる♪　壊れちゃう♪」
玲瓏たる貴婦人が、常の気品などかなぐり捨てて、白目を剥き、涎を噴きながら悶え狂う。
膣洞は狂ったように肉棒を締め上げ、ブシュブシュと熱い愛液をシャワーのように浴びせてきた。
「イきますっ！」
雄叫びとともにフィリックスは逸物をぐいっと押し込み、子宮口に亀頭部が完全に嵌まった状態で爆発させた。
どびゅ！　どびゅっ！　ドビュビュビュッ!!!
「はぁぁぁぁぁ〜〜〜ん♪」
美しい女鹿は射殺された。
歓喜の悲鳴を上げたグロリアーナは、そのままぐったりと崩れ落ちる。
(ふぅ〜、ママを完全にイかせちゃった)
満足したフィリックスが周囲を確認すると、グッジョブと言いたげに親指を上げてくれ

『第五章　高貴なる義務』より

「うん、おーじさまのおちんちん、入れて欲しい」
すっかり懐いているお姉さんに水を向けられたキャロルは、コクンと頷く。
「いや、でも……」
フィリックスの常識論は、ディアーネによって遮られる。
「勝負事にはなんでもルールがありますのよ。何をしてもいいというのでは鬼畜と同じですの。キャロルさんとあたくしは宿命のライバルですけど、新鉢を割るぐらいの協力はしてあげますわ」
何やら妙な理屈をまくし立てたディアーネは、いきなりキャロルの背後から抱きつくと、紺色のエプロンドレスの胸元をはだけさせた。
中からは小さな乳房というより、まったくない胸があらわとなる。ブラジャーはしていなかった。
（まぁ、どう考えても必要ないしな）
いわゆる俎板（まないた）に小豆といったところだ。
フィリックスが止める間もなく、ディアーネはさらにキャロルのミニスカートをたくし上げ、中から現れたカボチャパンツを引きずり下ろす。
そうして半裸になったキャロルを背後から抱き締めたままディアーネは、後ろに倒れた。
「はう……」
磔（はりつけ）にされた囚人のような姿勢を取らされたキャロルだが、突然のことに対処できなかっ

たらしく、ディアーネの上でぽけっとした顔をしている。
フィリックスの視界には、妖精の如き無垢な陰唇があらわになった。
（毛、一本も生えてないな）
驚くフィリックスの前で、ディアーネはさらに両足を使って、キャロルの両脚を開かせた上に、両腕を脇腹から回した。そして、人差し指と中指を使って、幼い陰唇をぱっかりと左右に開いてしまったのだ。
「……っ！」
年頃の乙女なら、羞恥のあまり気絶しかねないほどの悲惨な恥刑であろう。
しかし、天然少女はどこまでも茫洋とした顔をしているし、ディアーネのほうも善意でやっているのだから不思議な光景だ。
「さぁ、フィリックスさん。早くキャロルさんの新鉢を割って差し上げてくださいな」
「だから、キャロルには早いって！」
必死になって叫ぶフィリックスに、キャロルは小首を傾げた。
「おーじさま、キャロル嫌い？」
「そんなわけあるはずないだろ。大好きだよ」
「でも、キャロルにだけ入れてくれない……」
じわっとキャロルの目元に涙が浮かんでいる。そのいまにも泣きそうな表情は、見る者の良心を刺激してやまない。

どうやら、身近な人々がみんなフィリックスと結合しているのに、自分だけ相手にされないことが幼心なりに不満だったらしい。
「いや、それはね」
どう説明していいものか、と言葉を探すフィリックスに、ディアーネがあっけらかんと宣言する。
「フィリックスさんがドスケベだということはいまさら隠せないのですから、変に聖人ぶっても意味はありませんわ」
その評価にフィリックスは酢を飲んだような表情になった。しかし、客観的な事実として否定しようもないことも自覚する。やがて少年は諦めと吐息をついた。
「まったく、わかった。キャロルもぼくの女にする。キャロルもそれでいいんだね」
「うん……おーじさま……の女にして欲しい、の」
無垢なる妖精の答えを聞いて、フィリックスは覚悟を決めた。まずはその小さな唇に自らの唇を重ねる。小さな前歯を、小さな舌を舐め回すと、その唾液は驚くほどに甘かった。
「ふん、ああ……」
初接吻を終えたキャロルは、トロンとした瞳で見つめてくる。
(うわ、キャロルがすっかり女の顔をしている)
子供だとばかり思っていた少女が、じつは女だったのだと思い知らされる表情である。
不覚にも胸がときめいたフィリックスはついで、ぷっくらとした頬にキスをし、首筋か

ら胸元へと接吻を流す。
ほとんどまっ平らといっていい乳房だが、それでも乳首を舐められると気持ちいいものらしい。
「くぅ～……はぁん……」
子犬のように愛らしく鳴くキャロルを十分に楽しませてから、腹部を通って陰唇へと達する。
まったく毛の生えていない恥丘。陰唇はすでにディアーネの指で割られている。
（き、綺麗すぎる……）
媚肉はパールピンク色をしていて、作りは驚くほどに繊細だった。
包皮に完全に包まれた陰核。ポツンとした尿道に、窄まった膣穴。あるべきものはしっかりと揃い、透明な液体によってラッピングされているのだ。
そして、ふわっと温かい牝の匂いが鼻腔をくすぐった。
まだ女として未成熟に感じるのに、男を誘う淫華としては十分に機能していることを思い知らされる。
ゴクリッと生唾を飲んだフィリックスは舌を伸ばし、船底の一番下から上へと舐め上げた。
「はぐぅ～♪」
あまりの刺激に驚いたキャロルは反射的に足を閉じようとしたようだが、ディアーネの

脚に搦め捕られていてそれは叶わない。
（やっぱり敏感だな。こんなに敏感なんじゃ、クリトリスにはまだ触れられないな）
気をよくしたフィリックスは、若い樹液で喉を潤した。
ピチャピチャピチャピチャ……。
牝蜜はとめどなく溢れてきて、とてもではないが飲みきれない。肉船から溢れた液体が、ポタポタと滴り、下にあったディアーネの赤紫色のショーツのクロッチ部分に落ちていく。
それと気づいたフィリックスは、キャロルの陰唇を味わいながら、さりげなくディアーネの股間を撫でてやった。
「あんっ、フィリックスさん、いきなりそれは卑怯ですわっ⁉」
甲高い声で抗議するディアーネなどお構いなしに、ショーツ越しに肉割れをなぞるように優しく上下させる。
人を呪わば穴二つといったところか、キャロルを押さえているディアーネは逃れたくとも逃れられない。
「はぁ、ふぁぁぁ」
「あん、ああ、ダメですわ」
幼い容姿の少女と大人びた容姿の少女。二人の甘い嬌声が協奏曲となって聞こえてくる。
赤紫色をした過激なショーツは、内から溢れ出すディアーネの体液と、外から降り注ぐキャロルの体液によってぐっちょりと濡れそぼった。

（もう、そろそろいいかな？）
ディアーネとキャロルがとろんとろんに蕩けたことを見て取ったフィリックスは、キャロルの包皮に覆われた陰核に舌を乗せた。
「ひぃあ！」
薄い肉皮越しだが、コリッと硬くなっているのがわかる。
そこを舌先でクリクリクリクリクリクリと捏ね回してやった。
「ひ、ひぃ、ひぃ、ひぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
無垢なる少女が涎を噴きながら、ガクガクガクガクガクと身体を痙攣させたかと思うと、ガクンと力が抜けた。
（よし、イったな）
かわいらしい妖精が、完全に果てたことを見て取ったフィリックスは身を起こした。
そして、肉刀を構える。
「それじゃキャロル、いくよ」
「うん……キャロル、おーじさまとあんあんする……」
頬を火照らせた少女は、はにかみながら頷いた。
「ディアーネもいいね？」
「よろしいですわ。あたくしの身体がいかに素晴らしいかを知るための噛ませ犬ということで、キャロルさんとセックスすることを許しますわ」

いかにもディアーネらしい皮肉に苦笑しながらも、フィリックスはいきり立つ肉棒を彼女が広げる、キャロルの陰唇に添えた。
むっちりとしていながらも赤ん坊のようなツルツルの肉割れに添えると、自分の逸物が妙にグロテスクに感じる。
「キャロル……息を思いっきり吸って、それからゆっくりと吐くんだ」
緊張に声をこわばらせながらもフィリックスが命じると、素直な少女は言われるままに深呼吸をする。
気休めだが、息を吐いて力の入らない状態で入れようというのだ。
「ふぅ……」
キャロルが吐ききったところを見澄まして、フィリックスは腰を進めた。
「ふむ……!?」
小さな膣穴に、巨大な男根がムリムリムリムリという擬音が聞こえてきそうな雰囲気で撃ち込まれていく。ブツンと処女膜を突破して、さらに半分近くも入ったときである。先端にこつんとした行き止まりを察した。
(もう奥に届いちゃった……)
逸物の半分近くが膣外に残っている形だ。ふっと見上げると、キャロルは目元にいっぱいの涙を溜めて必死に耐えている。
「もういいよ、普通に息をして」

「はぅ！」
許可をもらったキャロルは思いっきり息を吸う。その拍子に膣洞が一段と締まる。
（セマっ！）
締まるというよりも狭い。肉棒が握りつぶされそうだ。
「おーじさま……」
キャロルは泣きそうな顔だ。いや、すでに目元には大粒の涙が溢れている。しかし、大声で泣くまいと必死に我慢しているのが伝わってきた。
罪悪感に胸が押しつぶされそうになったフィリックスは、思わずキャロルを抱き締める。
「はむ……」
小さな女の子は、ディアーネの女らしい肉感的な身体と、フィリックスの男の筋ばった身体にサンドイッチにされてしまった。
一番下のディアーネは重いかもしれないが、我慢してもらう。
「それじゃ動くよ。痛みが我慢できないようだったらすぐに言うんだよ」
「ううん、やっとおーじさまに入れてもらえて、キャロル、嬉しい」
健気すぎる少女を気遣いながら、フィリックスはゆっくりと腰を前後させた。
（うわ、狭い上にザラザラ……）
先ほどのディアーネとキャロルのダブルフェラによって、射精寸前まで追い詰められたところでお預けにされていたのだ。

逸物はたちまちのうちに昇り詰めてきた。
（くっ、いや、我慢する必要はないか。長引けばキャロルが苦しむだけだし）
破瓜に苦しむ少女を絶頂に持っていけるという自惚れはない。だから、事前にクンニで果てさせたのだ。
キャロルに女としての楽しみを教えるのは次回以降でいいだろう。
フィリックスは我慢せず、すぐにでも射精させるつもりで腰をリズミカルに使った。
「はぁ、ああ……ああ……」
幼い顔を辛そうに顰めたキャロルは世の中で頼れるのはこれだけ、というかのようにフィリックスに抱きついてくる。
「キャロル、いくよ……」
無邪気な少女に向かって優しく囁いたフィリックスは、男の欲望を解放させた。
「はぅ」
どびゅどびゅどびゅ！
狭い膣内が、熱い迸りで包まれる。
「ふぁ……」
小さな口が大きく開き、恍惚の吐息を吐く。
愛らしい芋虫が、美しい蝶へと生まれ変わった。少女が女へと花開く瞬間を垣間見たような不思議な錯覚にとらわれる。

『第六章　お仕置き』より

キュンッ！

膣穴が一段と締まった。おそらく肛門を締めたことで、膣穴まで連動したのだ。

「あらあら、あなたはもう坊やに穴という穴を掘られ尽くされているんだとばかり思っていたけど、ここはまだだったのね」

全身から冷たい脂汗を流すウルスラの耳元で、グロリアーナはねっとりと絡みつくように囁く。

「アナルはまだ処女だったってことは、少しきついかもしれないわね」

「な、何を……？」

怯えるウルスラの質問には直接答えず、グロリアーナは背後に声をかけた。

「まぁ、何事も経験よ。コーネリア、準備はできた？」

グロリアーナの視線の先を追うと、そこにはコーネリアが立っていた。

凛々しき男装の麗人も、素っ裸では男と見間違える者など存在しない。しかし、引き締まった体躯に、大きな乳房をさらした麗人は、なぜか内股になって恥ずかしそうに俯いていた。

そのらしくない仕草に驚いてよく見れば、高い位置にある股間から赤黒い異物がそびえたっている。

「え！　コーネリア……それは……？」

「主命だ」

赤面しながら応じたコーネリアは、いつぞやの疑似双頭男根を装着しているのだ。
スタイル抜群の麗人の股間から、グロテスクな男根がそびえたっている光景は、滑稽でありながら、妙に倒錯した色気がある。
「さぁ、コーネリア。あなた普段から男装なんてしているくらいだし、一度は男の真似事をしてみたかったんじゃなくて？」
「いえ、単に動きやすかっただけで」
「まぁ、どっちでもいいわ。さぁ、そのまがいもので、このムッツリスケベ女の肛門を犯してしまいなさい」
グロリアーナはウルスラの引き締まった尻を左右に割って肛門をさらす。
「ほら、あなたの尊敬するお姉さまの肛門よ。それも処女よ、処女。やりたくないの」
「ちょ、ちょっとママ、あんな太いものを入れたら、ウル姉のお尻が壊れちゃうよ」
「大丈夫よ。肛門でするセックスはアナルセックスっていって、嵌まる女は嵌まるらしいわよ」
つまり、グロリアーナも経験はないということか。
やめさせたい、という思いは無論あるが、勇猛果敢な女聖騎士ウルスラが、肛門を掘られたとき、どんな表情をするか、どんな反応をするのか見てみたいという好奇心を押さえられない。そして、ウルスラはフィリックスがやってみたいという性戯は無条件でやらせてくれる女である。

少年の心理を悟ったお姉さまは、素直に肛門を差し出した。
一方歩み寄るコーネリアも辛そうだ。おそらく一歩歩くごとに膣内に入っている異物によって、自らの肉体も苛まれるのだろう。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
内腿をテラテラと濡れ光らせるコーネリアは、股間からそそり立つ異物の突端をウルスラの肛門に添えた。
「さぁ、息を吐いてお尻の力を抜きなさい。そうしないと裂けちゃうわよ♪」
女王の命令に、聖騎士は力を抜く。
「それいまよ」
グロリアーナに促されたコーネリアは、腰を進めた。
「はがあああぁぁぁぁ!!!」
ゴリゴリゴリ……。
男根を押し込んでいる肉洞の向こう側に、確かに異物が入ったことがフィリックスにも伝わってきた。
冷静沈着にして剛勇無双の女騎士が、大口を開けて涎を噴き、目を見開いて涙を流している。
(うわ、ウル姉がすごい顔になっている。でも、どんなに崩れても綺麗だな)
悶えるウルスラの美顔に見惚れたフィリックスは自然と腰を使い始めてしまい、それに

合わせてコーネリアもまた腰を動かす。
「あ、ちょ、ちょっと待て、二人で動くのか⁉　あっ、お腹の中でぶつかる。ああ、ああ……ひぃ……」
ゴリ、ゴリゴリゴリ……。
本人が言う通り、薄い肉壁越しに、本物の男根と偽物の男根がぶつかりあう感触がある。
期せずして、目をかけている男女二人の弟子に前後の穴を同時に掘られたウルスラは、歯の根が合わさらなくなってしまったらしく、大きく口を開けて、涎を垂らし続ける。
「まったく、この女は、まだ気取っているわね。セックスのときぐらい我を忘れて解放できないものかしら」
グロリアーナは周囲の女たちに顎で命じた。
「これを機会に徹底的に堕として、この女もただの牝でしかないってことを、坊やに教えてあげなさい」
この指示に従って、ルイーズ、シャクティ、サーシャ、マガリ、キャロルたちが、ウルスラの身体をほとんど余すところなく取りついてしまったのだ。
「あああああああ!!!」
前後の穴を同時に掘られるだけで普通の女には許容を超えた快感だ。その上、身体中の性感帯を同時に責められたのだ。さすがのウルスラも理性がぶっ飛んだらしい。
普段の頼もしい女聖騎士ぶりと、いまのぶっ壊れた痴女ぶりのギャップに、みなが見惚

れている中、ただ一人空気を読まない女の泣き声が聞こえてきた。
「あたくしにも、あたくしにも参加させてくださいませ、こんなの酷すぎますわ」
御影石に大の字に張りつけられ、膣穴に花を活けられたディアーネである。
異母妹の泣き言を聞いたグロリアーナが溜め息をつく。
「もう、ほんとピーピーうるさいバカ猫ですわね。まったく、だれに似て、こんなに淫乱なのかしら？」
間違いなく異母姉似です、という言葉を口にする者はいなかった。
根負けしたと言いたげにグロリアーナは、泣きわめくディアーネに近づくと、その拘束を解いてやる。
自由の身になった舞姫は、股間に入れられた花を抜くのも忘れて、愛しい男の背後から抱きついた。
「フィリックスさま、そんな筋肉女はとっとと終わらせて、早くあたくしと楽しみましょう♪」
次に取ったディアーネの行動は、だれもの度肝を抜くものだった。
フィリックスとウルスラの結合部に頭を突っ込むと、そのまま逆立ちしたのである。
「っ！」
舞姫の麗しい生脚が少年の首にかかる。フィリックスはディアーネの股越しにウルスラの悶え顔を見ることになった。

(すごい……もうなんだかわけがわからないや)
床に座ったフィリックスはウルスラを犯しているはずだが、そのウルスラの肛門を背後からコーネリアが犯し、全身をルイーズ、シャクティ、サーシャ、マガリ、キャロルが舐め回し、さらには男女の結合部にディアーネが顔を突っ込み、なおかつ両脚でフィリックスの首を捕らえているのである。
「も、もう……」
睾丸から噴き出した熱い血潮が、肉棒を一気に駆け上がる。
「い、いくのか、もうイクのか」
理性が振りきれているウルスラに代わって、コーネリアが男の限界を察したらしい。興奮してますます激しく腰を使う。
ズンズンズンという振動がフィリックスにまで伝わってくる。
「どうやら、坊やがイクようですわね。ついでだから、あなたも一緒にイってしまいなさい」
悪戯っぽく笑ったグロリアーナが、コーネリアに何か悪戯したらしい。
「ひぃいいいいいいいい!!!」
ビクビクビクビクビク!!!
コーネリアの絶頂が、ウルスラの胎内を通じてフィリックスにまで伝わってきた。それが呼び水となる。

「うおおおおおおおお――――っ!!!」
雄叫びと同時に、子宮口にがっちりと嵌まった男根が勢いよく奔騰する血潮を噴き出す。
ドビュドビュドビュビュビュビュビュッッッッ!!!
「ひぃあ、ひぃああ、ひぃあああぁぁぁぁぁぁぁ――――ん!!!」
限界を超えた快感に涙を流しながら悶絶したウルスラが、プシャッと盛大に潮を噴き、ディアーネの顔を汚した。
「はぁ……はぁ……はぁ……」
心行くまで射精したフィリックスが心地よい疲労感に浸りながら仰向けに倒れると、その上にディアーネが寄り添ってきた。
「次はあたくしですわ」
「あなたは最後に決まっているでしょ」
異母姉妹の争いを聞きながらフィリックスは思った。
(女一人に溺れるのはダメで、たくさんの女性に溺れるのはいいのか……)
せっかく七日間溜めた精液も、一夜にしてすべてを絞り取られてしまうことだろう。
王太子としての厳しい修行の日々は、まだまだ終わりそうもなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

ピルグリムメイデンⅡ 白装の騎士

［小説：狩野景／挿絵：ほち］

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!

ちょっぴりマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!

BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜

［小説：夜士郎／原作 挿絵：渡瀬行人］

吸血姫と狩猟者三人の影が闇を斬る

隔月刊コミックヴァルキリーの人気連載漫画が待望のノベライズ!!

呪詛喰らい師（カースイーター）

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

2010 4/30 発売予定!!

セクシー退魔師が荒ぶる神様をエッチなご奉仕で鎮める伝奇アクション!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獣学園戦姫ノブナガッ!　①～③
- 愚者期なアダム　①～②
- 絢爛!帝都少女探偵団　赤い謀略を撃て!
- 借金お嬢クリス　①～②
- プリンセスリバージ!!　交錯する美姫と魔姫
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン　深紅の巡礼聖女

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!